

プノンペンの成立と他者性 —都市生活の背後にある空間構築史—

牧 野 冬 生*

Phnom Penh's Formation and Otherness: A History of the Spatial Construction Behind City Life

Fuyuki MAKINO*

Abstract

Cambodia has a long history stretching back approximately 1100 years to the Khmer Empire. This history is one of conflict with the countries that existed in the present-day regions of Thailand, Laos, and Vietnam. One of the ways Cambodia countered threats from neighboring countries was by incorporating itself into French Indochina. Urban planning during the French Indochina era is an important element when considering the city environment of Phnom Penh. Elements such as population movements due to the Cambodian Civil War, increases in population density, and the city's abandonment by the Khmer Rouge administration also contributed largely to the areas in which residents live and its city environment. The complex nature of Cambodia's border relations with its surrounding countries and its history of conflict gave birth to Phnom Penh's unique ethnic composition and city environment. When looking at the relationship between people and space in the city, one must consider the post-1979 process of re-establishing residents there, as well as the residential districts of various ethnicities that changed amidst the city's post-United Nations Transitional Authority in Cambodia expansion. This paper examines the history of the formation of the largest city in Cambodia and the relationships between people that can be seen through the contemporary forms of residence within its metropolitan area.

1. はじめに

カンボジアは、旧扶南王朝と真臘の出身であるヤショヴァルマン王が作ったアンコール王朝から考えても約1100年という長い歴史がある。その歴史は、現在のタイ、ラオス、ヴェトナムに存在していた国との争いの歴史であった。その過程で、クメール王国の支配地域は何度も塗

り替えられた。隣国からの脅威に対抗するひとつの手段が、近代になってからのフランス領インドシナ連邦への組入れであった。一方で、こうした隣国との国境の重層性と争いの歴史が、プノンペンに特徴的な民族構成と都市環境を生み出し、現在の生活空間を成立させることになった。本稿では、カンボジアの最大の都市で

* 駒沢女子大学 非常勤講師

あるプノンペンに焦点を絞って、プノンペンの都市形成の歴史、都市部の居住形式から見てくる人々の関係性について考察してみたい。

2. プノンペンの空間構築史

2.1 行政区と人口構成

プノンペンはカンボジア王国の首都であり、州に属さない特別市¹である。以前は7つの行政区で構成されていたが、2010年にカンダール州の20のサンカットと呼ばれる村落を編入して新たに行政区を新設した。2011年には、新設した行政区をさらに二つに分割した。この新規行政区の設定によって、プノンペンの面積は376.17km²から678.47km²と倍増した(図1)。

現在プノンペンは、9つの行政区(Khans : Districts)で構成され、東京都23区(622.99km²)とほぼ同等の広さである。9つの行政区は76の地域(Sangkats : communes)、さらに637の町(Kroms : villages)に細分される。人口密度が高い中心市街地は、プランピー・マカラ区(7 Makara)を中心に、ドン・ペン区(Don Penh)、チャムカー・モン区(Chamkar Morn)、トゥール・コーク区(Toul Kork)の4区である。その周りに、ルッセイ・カエウ区(Russei Keo)、ミアン・チャイ区(Mean Chey)、セアン・ソー区(Saen Sokh)があり、その西側に2011年に新設されたドン・カオ区



図2 プノンペンの9行政区³

(Dang Kor)、ポル・センチェイ区(Por Senchey)の5区が位置している(図2)。

カンボジアの人口は、2013年で約1467万人⁴である。このうち、0歳～24歳までの人口が全体の52.1%を占めている。1975年から1979年まで続いたクメール・ルージュ政権時代の大虐殺の影響で、55歳～69歳(1979年当時19歳～33歳)及び35歳～39歳(1979年当時0～4歳)の人口が極端に少ない(図3)。新しい行政区を含むと、人口はプノンペン市で150万人を超える⁵。プノンペン中心市街地4区は26km²で、プノンペン全体のわずか3.8%の面積であるが、

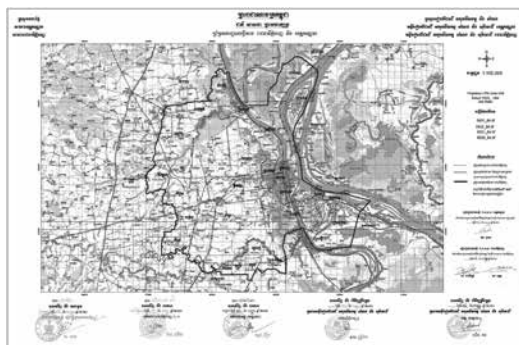


図1 プノンペンの行政区範囲²

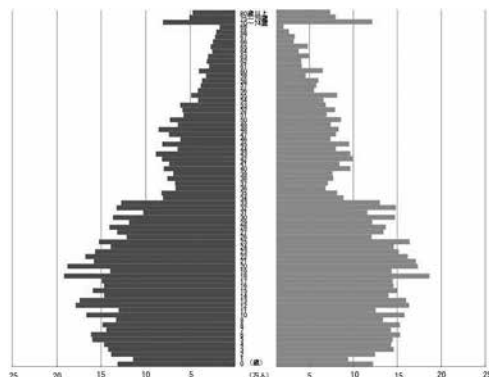


図3 カンボジアの人口ピラミッド 2013年⁶

2.2 プノンペン成立の歴史

[illegible]

(1) クメール王朝時代 (15世紀)

(2) フランス人入植による都市整備 (19世紀半ば)

— 207 —



図5 1867年のプノンペン¹¹

華僑は、13世紀のアンコール時代からクメール王朝と貿易を行っており、19世紀後半もカンボジア内には多くの華僑が居住していた。中国南東部、広東省出身者が多く、1874年の華僑人口は約10万人であり、カンボジア人口全体の十分の一が華僑であった。当時のプノンペンの人口は、3万人程度である。

(3) ヴェルネヴィルによる都市開発（19世紀後半－20世紀初頭）

19世紀後半、フランス領インドシナ総督であったポール・ドゥメールは、政治体制の大きな改革¹²を実施し、クメール王の政治への関与は大幅に縮小された。この改革によりカンボジアは、1897年から1945年まで実質的にフランスの植民地となった。フランスは、行政組織と各

都市を管理する行政区の整備に取り掛かった。フランスと保護条約を結ぶ以前、1860年代のクメール王国は、緩やかに5地方に分割され56の地方行政によって統治されていた。1884年に、フランスは8のケット(州)と32のスロック(郡)に分割・統合した。さらに、プノンペン、クロチェ、コンポントム、コンポート、プーサットにフランス人理事官が駐留する理事官区を設置し、州を理事官区が監督する組織体制を作った。また、理事官をまとめる理事長官も設置された。理事官区は、インドシナ総督府の組織であり、その配下にケットとスロックというカンボジア王国の行政の枠組みがある。1908年にカンボジア人による最小の行政単位として、クム(Khum、現在のcommunesのレベル)が設置され、カンボジア人の管理による行政区分の原型となった。

近代プノンペンの都市開発に大きな影響を及ぼしたのは、1889年から1897年まで理事長官を務めたヴェルネヴィル(Huyn de Verneville)である。ヴェルネヴィルは、多くの公共工事を実施して、プノンペンの都市骨格を整備していった。トンレ・サップ川沿いのメイン道路を拡張し、ノロドム通りや運河の整備を行った(図6)。また、個別にも市内の病院、教会、市場の改修など、都市改革は多岐にわたった。

フランスがヴェトナムで行った植民地事業に



図6 1914年のプノンペン¹³

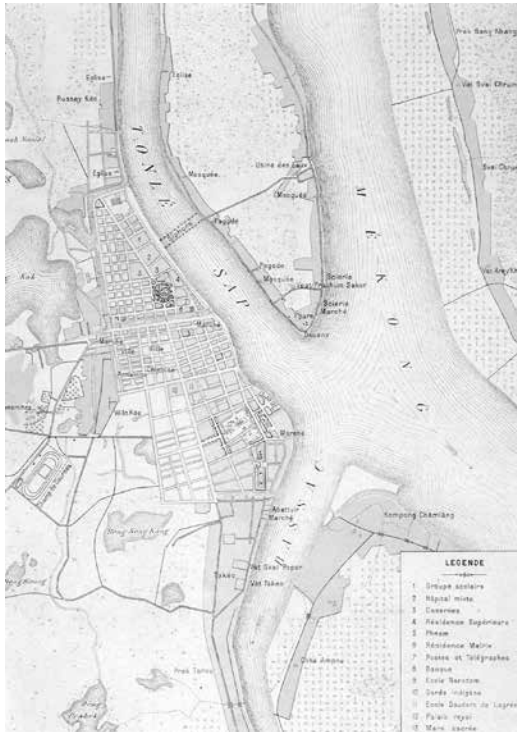


図7 1920年のプノンペン¹⁴

比較すると、経済的にはあまり大きな実績を残せていないが、政治的には、フランス人、華僑、安南人を優遇するものであった。この優遇措置を象徴するかのよう、ワット・プノン周辺にはフランス人、運河を挟んで南には華僑と安南人の居住区が設置された。ヴェルネヴィルが整備した運河上のナガ橋（Naga Bridge）は、それらの居住区を繋いでいた。南の王宮周辺地区には、クメール人が居住し、プノンペンでは明確な住まい分けがなされていた（図7）。ヴェルネヴィルが去る1897年の時点で、プノンペンの人口は約5万人、内訳は、フランス人が400人、中国人が22,000人、アンナン人が4,000人、カンボジア人が16,000人程度であった。

（4）エブラールによる街路編成（1923年－1940年代）

20世紀に入り、プノンペンの都市範囲は急速

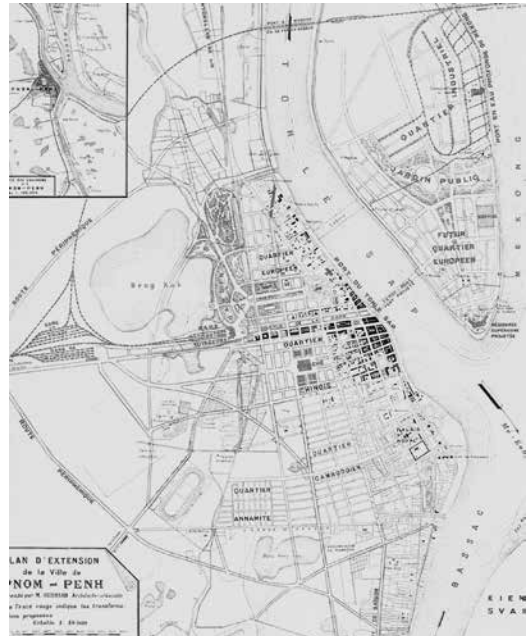


図8 1925年のプノンペン¹⁵

に拡大していった。プノンペンは、拡大する人口に対応するため、飲料水をメコン川からパイプラインを通して供給し、1901年には市内に街灯が設置された。多くの建築家や都市計画家が、近代プノンペンの都市計画に尽力した。現在も残るコロニアル様式の中央郵便局は、建築家ダニエル・ファブレ（Daniel Fabre）によって設計された。1923年には、フランス領インドシナ都市開発理事会が設立され、初代理事長としてエルネスト・エブラールが就任した。1925年のプノンペン都市計画図を見ると（図8）、フランス人と華僑の居住地を隔てていた運河が埋め立てられて（図9）、現在のドン・ベン区北部にフランス人居住区、中央市場とブランピー・マカラ区が華僑居住区であり、ドン・ベン区南部にカンボジア人居住区、チャムカー・モン区の北のボンケンコン地区に安南人居住区が計画されているのがわかる。安南人は、この計画で華僑に隣接した居住区からより南に移動となっている。1929年にはロイヤル・ホテルが開業し、



図9 1928-29年の運河の埋立て¹⁶

プノンペン駅舎建設と鉄道の敷設が開始された。1932年に、線路はプノンペンからプルサットまで整備された。1935年から1937年にかけては、中央市場が建設され、エブラールの計画に沿って都市の骨格が出来上がっていった。

1937年以降、日中戦争の影響で多くの中国人がプノンペンに流入し、定住を始めた。理事官は、華僑を出身地別に5つのコングレガシオン（広東、海南、潮州、福建、客家）に分けて管理した。それぞれのコングレガシオンには、一定の自治が認められ、独自の学校が運営されて新聞も発行されていた。コングレガシオンには、カンボジア政府の権限は及ばないため、ここでもフランス植民地下における華僑への優遇が指摘できる。

3. プノンペンの大きな変化

3.1 都市への人口集中と不法占拠地の形成

プノンペンでは1950年に新たな都市計画が策定され、都市のシンボルともいえる大規模計画が実行に移されていった。1963年には建築家ヴァン・モリヴァン（Vann Molyvann）の設計による国立総合競技場が建設され、オルセー・マーケットやオリンピックスタジアム・マーケットが整備された。その一方で、ベトナムとの紛争の中で多くの犠牲者や難民が発生し、地方での戦禍を逃れるために住民が都市へ

表1 プノンペン人口推移¹⁷

年	人口(人)
1939 年	108,000
1942 年	111,000
1950 年	354,000
1956 年	592,000
1958 年	355,000
1962 年	394,000
1968 年	610,000
1970 年	900,000
1975 年	1,500,000-2,000,000
1979 年	100,000
1985 年	427,000
1990 年	615,000
1998 年	999,804
2008 年	1,325,681

移動した。各時代の人口統計には各資料により大きな違いがあるが、ここではミシェル・イゴウトを参照して1940年以降のプノンペンの人口推移をまとめる（表1）。

人口推移で注目すべきなのは、1950年代、1970年代、1990年代の人口増加と、その間を挟む1950年代後半、1970年代後半の人口減少である。20世紀半ば以降のプノンペンは近代都市として整備される一方で、大きな政治的变化に巻き込まれていく。ここでは以下の4つの時代に区分する。

3.2 インドシナ戦争下における都市への人口集中（1940年代後半から1950年代）

1940年代後半を境に、プノンペンには大きな変化の波が訪れた。1946年、ヴェトナムとフランスの間でインドシナ戦争が勃発し、ラオスとカンボジアも戦禍に巻き込まれた。カンボジア国内では、内陸部農村から都市へ、多くの移住者が発生した。1953年にシアヌーク国王はカンボジア独立を果たした。ジュネーブ会議後に、

カンボジアからのヴェトミン軍とクメール・ヴェトミン軍の撤退が実施された。1955年にシアヌーク国王は、ノドロム・スラムリットに王位を譲り本格的な政治活動に入った。

イゴウトは1950年代半ばの人口増加の原因として、フランス軍との戦闘に追われたヴェトミン軍の多くがプノンペン入りし、一時的に人口が膨れ上がったと説明している。デルヴェールによると、1950年にカンボジア全体で華僑人口が約21万人であり、1874年時点で10万人程度であった華僑人口が70年近く経過しても10万人程度しか増加していないと指摘している。これは、人口の増加率から推定すると、華僑の子孫と考えられる約30万人はカンボジア人として同地に居住していることを意味すると言う。

ヴェトナム人は、1950年で25万人程度であった。フランス植民地下においては、華僑と同様にヴェトナム人のプノンペン移住も優遇されており、カンボジア行政はヴェトナム人を中堅官吏や下級役人として採用していた。1950年には、カンダール州で人口の三分の二、プレイヴェン州では人口の五分の四をヴェトナム人が占めたという。今のクメール・イスラム（チャム人）や、島嶼部東南アジアから移住してきたムスリムも、1950年時点で10万人程度いた。しかし、少数派であったクメール・イスラムに対する都市計画上の居住区の設定や政策上の配慮はなく、その存在は周縁化されていた。彼らは、トンレ・サップ川やバサック川沿いに集住していた。プノンペンの人口は、1958年に35万5千人、1968年に61万人となり、プノンペン市民の三分の二はカンボジア語を母語としていた。その他の都市ではバタンバンで5万人、コンボンチャムは3万人に満たない程度であった。

3.3 クメール・ルージュ政権前後の都市への人口集中、強制移動、再移住（1960年代後半から1970年代）

カンボジアでは、1960年にスラムリット王の死後の政治的混乱や国内抵抗勢力の台頭がありつつも、1970年ごろまではシアヌークが主導した政治下において比較的安定した時代であった。1970年にシアヌークは国家元首を解任され、カンボジアには国家非常事態宣言が発令された。シアヌークは、カンプチア民族統一戦線を結成し、ヴェトナム民主共和国（北ヴェトナム）と南ヴェトナム解放民族戦線（ヴェトコン）に介入を要請した。これを機に北ヴェトナム軍とヴェトコンが進駐し、南ヴェトナム共和国も自国民の保護を目的に介入した。北ヴェトナム軍は、カンボジアの農村地域に進攻してアンコールワット付近まで及んだため、多くの農民は都市に移動した。この時期のプノンペンの人口は、150万から200万人とも言われるが、正確な人数は不明である。都市への極度の人口集中によって、食料不足や居住環境悪化は深刻となり、バラック建ての不法占拠地域の増加で、都市全体が極貧状態に陥った。

クメール・ルージュ軍は、この時期農村に留まっていた若い農民を中心に勧誘活動を行った。1973年には2万人を超えるクメール・ルージュ軍が出来上がっていた。1974年の末には、農村からの人口流入が起これプノンペンの人口は200万人以上となり、ハイパーインフレを招いた。政治的にも経済的にも、プノンペンは危機的状況にあった。1975年4月17日にクメール・ルージュ軍はプノンペンに攻め入り、4月17日から18日にかけてプノンペンに居住する全市民を市内から強制退去させた。1975年から1979年までプノンペンは、人のいない空白の都市となる(写真1, 2)。

1978年、カンボジアはヴェトナムと交戦状態



写真1 1979年2月プノンペン市内¹⁸



写真2 1979年2月プノンペン市内¹⁹

(第三次インドシナ戦争)となった。1979年にベトナム軍がプノンペンに侵攻したことで、カンボジア人はクメール・ルージュ軍から解放された。その後、住民の急速な都市回帰現象が起り1981年でプノンペンの人口は36万人となった。第三次インドシナ戦争が終結する1989年までは、カンボジアは事実上の鎖国状態であり、カンボジア全体で20万人のベトナム兵が駐留していた。その一方で、クメール・ルージュ政権時代に海外へ避難した人々や、タイ国境の難民キャンプに居住していた35万人の多くは、国内状況に抵抗して帰国を拒否していた。

3.4 UNTAC 以後の都市の復興(1991年以後)

本格的なプノンペンの都市復興は、国際連合カンボジア暫定統治機構(UNTAC)まで待たなければならない。1991年にパリ和平協定が調印され、同年11月に国連軍がカンボジアに到着

した。1993年5月には、初の民主選挙が開かれた。この選挙に向けて、1万人の文民と軍人が従事した。通信網が再開され、地雷の撤去、タイ国境からの難民の帰還、カンボジア4派部隊の武装解除も実施された。こうした都市復興政策と同時に、国連軍の落とすドルや国連職員の給料を目当てに、多くの商売人、相場師、出稼ぎ労働者などが、プノンペンに集まってきた。

ホテルが再開し、国際機関や政府職員は、比較的安全なホテルに居住していた。プノンペンに帰還した住民は、住んでいた地区へ戻ったり、不在であったフランス人地区やドン・ベン地区の華僑居住区を不法占拠した。クメール・ルージュ時代の集团的土地制度の導入によって、以前の土地関係書類は散逸しており、従来の土地を取り戻せない住民も多かった。技術者、知識人等の社会的なリーダーの不足の中で、経済の回復の兆しが見え始めたのは1990年代後半からであった。

3.5 2000年代—現在

カンボジアにおける経済は2000年以降順調に推移し、2007年まで二ケタ成長を果たした。一人当たりのGDPを見ると、2000年には918ドルであったが、2010年には2,194ドルまで上昇し大幅な伸びを見せた²⁰。こうした経済成長の中で、様々な都市開発プロジェクトが政府や民間企業によって実施された。2007年、プノンペンマスタープラン2020が策定され、修正プランが2009年に完成した。プノンペン北部の開発、道路の整備、民間による都市開発、サテライトシティの建設、ボンコック湖の埋め立てによる開発など多岐にわたる。現在プノンペンは大きく変容している。新たにバサック川の埋立てが行われ、ホテル、ショッピングモール、高層マンションがあちこちに建設されている。一方で、そうした建設ラッシュによってフランス統治時

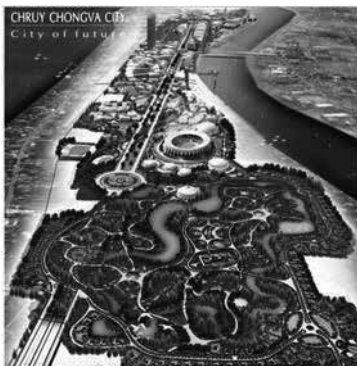


図10 チュルイ・チャンガ・シティ鳥瞰図²¹



図11 チュルイ・チャンガ・シティ PLAN²²

代の遺産はどんどん姿を消している。チュルイ・チャンガ・シティ（Chruy Changva City）の開発計画を見ると、広大な公園、国際スタジアム、ASEAN + 3 向けの開発エリア、高級住宅街などが予定されており、プノンペン市内から郊外への富裕層の居住を促すようなプランが計画されている（図10, 11）。一方、都市に居住していた多くの不法占拠地域が取り壊され、居住者は郊外に強制移住させられた。2007年の時点で、41の再定住地があり、強制移住の対象となったのは15,831家族である（図12）。

4. 都市居住形式

4.1 低中層住居

プノンペン市内には、低層中層住居が多く構造も木造、レンガ造、コンクリートブロック造

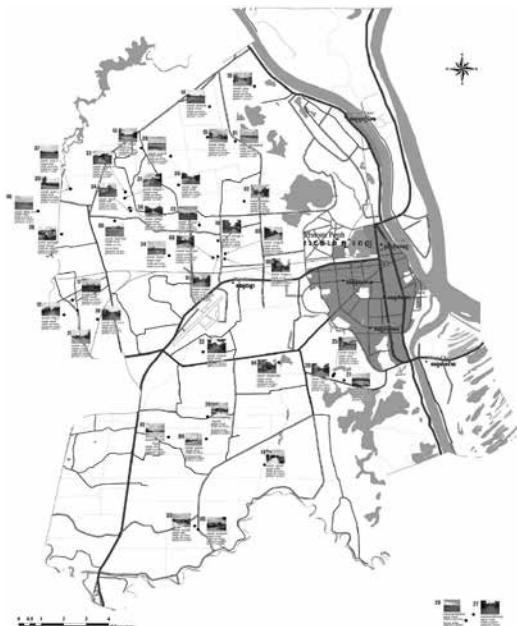


図12 2008年のプノンペン再定住地41か所²³



写真3 バンケンコン地区の低層住宅

又はそれらの混構造でありバリエーションは豊富である（写真3）。1964年のプノンペン中心



写真4 1964年のプノンペン中心部²⁴



写真5 1964年のプノンペン周辺部²⁵

部は中層の建物が建ち並び、その周辺部に低層木造住宅が立ち並んでいる様子がわかる（写真4, 5）。エブラールの都市計画図で、華僑及びヴェトナム人居住区として計画された場所であり、現在も住宅密集度が高い地域である。大通りを挟んでフランス人居住区は、緑が多くゆったりとした空間が広がっている様子がわかる。王宮周辺には低層木造のカンボジア人居住区が位置し、その外側に農村からの移住者のエリアがあった。

都市中心部の拡大に伴って、徐々に低層住宅から2層から3層へと建て替わっていった。こうした都市周辺部の低層住居は、住民によるセルフビルドによって建設されたものである。一部、大規模な木造住居は、現在もレストランやショップとして転用され、取り壊しを免れている（写真6）。



写真6 バンケンコン地区の雑貨屋



写真7 1903年のカンボジア人居住地域、ボンコック湖付近²⁶



写真8 プノンペン郊外の家²⁷

プノンペン郊外では、東南アジア一帯に見られる高床式住居が多い。高床式住居は、農村の一般的な住居形態であった（写真7）。居室部分を持ち上げて2階部分とすることで、床下の風通しを良くして湿気を軽減させ、快適な居住

空間を確保することができる。現在の住宅は1階部分にも壁を作り、共有空間や個人商店として利用している場合も多い（写真8）。

4.2 ショップハウス

プノンペンの都市景観の多くの部分を占めているのは、ショップハウスと言われる店舗と居住空間が一体化した中層の建物である。1900年代には、トンレ・サップ川沿いのメインストリートに華僑による多くのショップハウスが作られた。その後は、都市計画によって華僑居住区とされた地域に多くのショップハウスが作られた（写真9）。ショップハウスは横に繋がっている場合が多く、ひとつの建物に多くのショップハウスが隣接しているものと、独立したショップハウスが近接して建てられているものがある。もともとトンレ・サップ川沿いや華



写真9 1940年の華僑居住地域、Street13付近²⁸



写真10 ショップハウス²⁹

僑居住区に多かったショップハウスは、現在は市内全域に広がりカンボジアの都市景観の大きな部分を占めている（写真10）。家内事業である場合が多いため、職住一体で生活する都市住民の特徴的空間といえる。また、上部の部屋の一部を借家として貸し出している場合も多い。

4.3 大規模住居

プノンペン中心部には、フランス統治時代の大規模なコロニアル住宅が残っている。現在も住居として使われているものもあるが、クメール・ルージュ政権以後に住民が戻らずにそのまま廃墟となっている住居も点在している（写真11）。また、近年の都市開発の中で既に取り壊されたものも多い³⁰。住宅は高い塀で囲われ、外部も内部も重厚なコロニアル装飾が施されている。都市中心部の大規模住宅は、一部は修復されて、レストランやショップとして利用されている。また、近年新築されている大規模住宅



写真11 廃墟のコロニアル住宅、Street178付近³¹



写真12 新築の大規模住宅、ボンケンコン地区³²

も多くあり、主にカンボジア政府関係、軍関係、外国人向けである（写真12）。高い鉄格子の門が設置され、入り口には車寄せがある。また、必ず警備員が配置されている。

4.4 ゲーテッド・コミュニティ

UNTAC 以後、国連職員、NGO 団体、外国政府関係者向けの居住地域として、ゲーテッド・コミュニティが作られた。プノンペンの空港から市内に向かう Street2004沿いに作られたノースブリッジ・コミュニティ（Northbridge Community）は、初期のゲーテッド・コミュニティである。現在はプノンペンの一部であり、セアン・ソーク区南部に位置する。1997年にインターナショナルスクールが開設された後、2001年に外資企業とカンボジアの合併プロジェクトとして、住居地区の開発が行われた。日本大使館の裏手には、バサック・ガーデン・シティ（Bassac garden city）によって、現在も大規

模な住宅開発が続いている。2011年には、その隣にローズ・ガーデン・シティという28階建てのマンション4棟が完成した。

4.5 中高層住居

現在のプノンペン中心部では、複数の中層住宅が取り壊されて、新たに高層の建物に変わっていく新たな段階に入っている。2010年以降の変化としては、外国資本を取り込んでボンケンコン地区、オリンピックセンター周辺地区を中心に大規模な高層マンションの建設が急速に進んでいる（写真13）。さらにすぐ隣では、バサック川を埋め立てて、ダイヤモンド・アイランドという再開発区域³³があり、大規模な住居開発も行われている（写真14）。こうした高層住宅の建設は大きくプノンペンの都市景観を変えている。



写真13 中高層への建替、ボンケンコン地区



写真14 ダイヤモンド・アイランド³⁴



写真15 不法占拠地域、プノンペン郊外カンダール州との州境³⁵

4.6 不法占拠地域（スクウォッター）

プノンペン中心部に居住していた多くの不法占拠者は、道路拡張や住居開発などの都市開発プロジェクトによって郊外に移動させられた（写真15）。一方で、移動した住民たちの多くは、代替地で十分な収入を得ることが出来ず、プノンペン中心部に戻ってくるものも少なくない。高級住居地域に挟まれるようにして、存在していた不法占拠地域は徐々に姿を消しているが、郊外ではむしろ再定住が起り、新たな都市の隙間に不法占拠地域を形成している。上下水道のインフラは整備されておらず、盗電していることも多い。不法占拠地域は、非常に脆弱な複数の狭小住居の集合体であり、プノンペンの都

市環境の一部として存在している。

5. 都市環境と他者性

5.1 混住の多様性

プノンペンは都市形成の歴史を考えると、隣国との国境の重層性とフランス統治による影響を主な理由として、カンボジア人の他に、フランス人、華僑、ヴェトナム人、ラオス人などを中心として、多くの外国人が居住するメトロポリタン・シティであった。特に、エブラールの都市計画では、フランス人、華僑、ヴェトナム人、カンボジア人の居住区がそれぞれ設定され、明確な住まい分けがなされていた。その後、1950年代の人口増加により都市居住密度が高まり、多くの不法占拠地域が構築されることで混住がすすんだ。都市における貧困層と富裕層の隣接は、近年に始まったものではなく1970年代、1990年代のそれぞれの過程で、隣国との争いと内戦の影響によって発生したのである。特に、1970年代の200万人を超えるプノンペンの人口集中は、富裕層と貧困層の隣接を促進した。また、クメール・ルージュ政権以後は、ヴェトナム軍とヴェトナム人の多くがカンボジアに移住したため、新たな住まい分けが必要であった。1991年に UNTAC がプノンペン入りしてからは、その他の外国人、特に欧米人が多く住む新しい居住地域が設定された。華僑の多くは都市居住者であったためにクメール・ルージュ政権時代に差別を受け、多くの人が処刑の対象となった。1975年時点で42万にいた華僑は、1979年には約半数の20万人まで減少した。現在も、華僑はカンボジア市民であったとしても一部で差別的な扱いを受けており、例えばカンボジア人民党の正式な党員になることはできない³⁶。一方で華僑は、プノンペン市内のあちこちに点在しながらショップハウスを展開し、プノンペンの都市風景を拡大している。



写真16 クメール・イスラムの人々³⁷



写真17 クメール・イスラム集住地域³⁸

クメール・イスラムの人々も、かつて住んでいたトンレ・サップ川やバサック川沿いに戻った。プノンペン特別区の南部、バサック川沿いのカンダール州との州境には、主に漁業を生業としてクメール・イスラムの人々が集住して住む地区がある（写真16,17）。しかし、未だに正式に土地を取り戻せないなどクメール・ルージュ時代の傷跡は強く残っている。プノンペンは、カンボジア人以外の外国人の居住地域が、都市環境整備に大きく影響している。現在のプノンペンにおける都市空間は、こうした歴史性を抱えている。

5.2 プノンペンにおける居住地域の逆転

1975-79年にクメール・ルージュ政権によっ

てプノンペンは一旦廃墟となったが、1979年以降にプノンペンに戻ってきた住民は自由に住居を占拠することができた。この時代は、プノンペンの住居は、いわば早いもの勝ちで所有することが出来たのである。こうした時代には、貧困層と富裕層の区別はあまり意味をなさなかった。現在、ワット・プノン周辺の治安はかなり改善されたが、2000年代初めまでは麻薬の売買人などが多く横行し、治安が悪化していた。その理由としては、かつてワット・プノン周辺が、富裕層であったフランス人居住区であったことが影響しているのではないだろうか。仮説として、クメール・ルージュ政権崩壊後にプノンペンに戻ってきた住民は、従来のセフルビルドによる脆弱な木造住宅の多くが崩壊していたため、比較的大規模で安全な構造を保っていた華僑居住区のショップハウスや、フランス人居住区の大規模住宅を共同で占拠した。そのため、以前の居住区と大きく住まい分けが入れ替わったと考えることが出来る。その後、カンボジア復興の援助のためにきた多くの外国人は、プノンペン中心部でも比較的人が少なかったボンケンコン地区に好んで居住するようになり、新しい居住地域の設定が行われた。

6. おわりに

プノンペンの都市環境を考える際に重要な要素として、フランス領インドシナ時代の都市計画、隣国との争いや内戦による人口移動と都市集中、人口密度の増加による貧困化、クメール・ルージュ政権前後の都市開発の断絶といった要素が、その後の住まい分けと都市環境に大きく関係している。特に、都市における人と空間の関係性を見る場合、1979年以降のプノンペンへの住民の帰還のプロセスと、UNTAC 以後の都市拡大において変化した各民族(外国人を含む)の居住構成をより個別的な生活調査から詳細に

検討する必要がある、今後の課題として残されている。

¹ カンボジアには特別市がケップ、パイリン、シアヌークビル、プノンペン、の4つあった。このうちケップ、パイリン、シアヌークビルは、2008年に州に組み入れられて、現在プノンペンのみが特別市として残っている。

² PPCH & JICA (2011) Overview of Urban Development in Phnom Penh Capital City, Urbanization Division Phnom Penh Capital Hall & JICA Urban Management Advisor, Cambodia, p.1

³ PPCH & JICA (2011), p.6

⁴ 2005年から、カンボジア計画省統計局に対する JICA の技術協力プロジェクトとして、人口センサス実施の技術指導が実施されている。2008年には人口センサスの結果が発表された。これにより、カンボジアの正確な人口構成がわかった。次回の2018年実施予定の人口センサス調査の中間にあたる2013年には、中間年人口調査の結果が公表された。
(<http://www.stat.go.jp/info/meetings/cambodia/cips2013.htm>)

⁵ 2008年にはまだプノンペンの新行政区の設定は行われていないが、2008年の人口統計で編入地区（調査当時はカンダール州）の人口を含むと、その時点で既に150万人を超えている。

⁶ カンボジアの人口ピラミッドについては以下のサイトを参照のこと。 <http://www.stat.go.jp/info/meetings/cambodia/pdf/pyramil3.pdf>

⁷ Michel Igout (1993) Phnom Penh Then and Now, White Lotus.

⁸ ワット・ウナロム、ワット・コー、ワット・ランカー、ワット・パムブロン、ワット・プッ

タコーサが河川沿いに配置されている。

⁹ 出典：Michel Igout (1993), p.30

¹⁰ 安南人は、フランス領インドシナ連邦において現在のヴェトナム中部地方に対して安南という名称が用いられた。また学術書でも、安南人という呼称がヴェトナム人全体に対して使われることも多く、実際には1945年ぐらいまで安南人（Annamese）という言葉が用いられた。

¹¹ 出典：Michel Igout (1993), p.34

¹² カンボジアの行政制度変革の歴史は、「高橋宏明（2001）“第2章 近現代カンボジアにおける中央・地方行政制度の形成過程と政治主体”，カンボジアの復興・開発，天川直子編，アジア経済研究所」に詳しい。ここでの政治体制の区分などは、高橋の議論を参照している。1897年の王令では、フランス人理事長官の署名が王令の公布の際に必須として王の法律公布権限を制限したことで、実質的なクメール王の権限を大幅に制限した。

¹³ 出典：Michel Igout (1993), p.50

¹⁴ 出典：Michel Igout (1993), p.82

¹⁵ 出典：Michel Igout (1993), p.85

¹⁶ 出典：Michel Igout (1993), p.80

¹⁷ Michel Igout 1993を基に、牧野が表を作成。

¹⁸ 出典：Michel Igout (1993), p.118

¹⁹ 出典：Michel Igout (1993), p.119

²⁰ 「カンボジア HHRD プロジェクト調査コンソーシアム（2012）日本の医療サービスの海外展開に関する調査（カンボジア HHRD プロジェクト事前調査）報告書」を参照のこと。

²¹ 出典：PPCH & JICA (2011), p.70

²² 出典：PPCH & JICA (2011), p.70

²³ 出典：PPCH & JICA (2011), p.25

²⁴ 出典：Michel Igout (1993), p.107

²⁵ 出典：Michel Igout (1993), p.107

²⁶ 出典：Michel Igout (1993), p.124

- ²⁷ 筆者撮影
- ²⁸ 出典：Michel Igout (1993), p.126
- ²⁹ 筆者撮影
- ³⁰ 近年の都市開発において、特にフランス統治時代のコロニアル住宅の多くが取り壊しの危機に瀕している。<http://www.ft.com/intl/cms/s/2/b41e7b00-b892-11e2-869f-00144feabdc0.html>
- ³¹ 筆者撮影
- ³² 筆者撮影
- ³³ 2014年に日本のイオンが進出してショッピングセンターが開業した。
- ³⁴ 筆者撮影
- ³⁵ 筆者撮影
- ³⁶ <http://www.culturalsurvival.org/ourpublications/csq/article/the-survival-cambodias-ethnic-minorities>
- ³⁷ 筆者撮影
- ³⁸ 筆者撮影